

Who killed the

sheep?



白い床に、白い壁。白い天井。白く光る蛍光灯が、真っ白な空間を一層白く映し出していた。その空間には人が二人。追い詰める者と、追い詰められる者。追い詰められる者は暗い顔をして、呟いた。
「違うんです。誤解なんです」

*

いつも通りの朝だった。いつも通りの通勤だった。そして私はいつも通り、会社に行くはずだった。しかし、気が付くと、俺は部屋に閉じ込められていた。その部屋は窓もなければドアもない。内側からも開ける事ができない、密室であった。

どうしてこんな事になったのか、俺にはその記憶がなかった。気が付くと、約五メートル四方の部屋に閉じ込められていた。何もない真っ白な部屋の中に。

いや、何もないというのは嘘だ。まず一つ、俺が存在している。二つ、小さな羊が部屋の隅で私を見ていた。

俺は、なぜ羊がいるのか、と考えた後に、羊に恐怖を抱いた。体は小さいながらも、もしかしたら襲ってくるかもしれない。俺は体を緊張させて、羊と数分間、にらみ合った。いや、にらみ合ったというより、俺が一方的ににらんでいたと言ったほうが適切だろう。子羊が俺に敵意を抱いている様子はなかったのだ。むしろ、体を小刻みに震わせ、俺という存在を恐れている節さえあった。

敵意がないと分かれば、羊に構う理由もない。人畜無害である羊のことは放っておき、俺は浮かんでくる疑問を解決しようとした。

『ドアがない部屋に俺はどうやって入ったのだろうか』『いったい誰がどんな目的でこんなことをしたのか』それは素朴な疑問だったが、それを考えたのは十五分程度だった。なぜなら俺にはもっと考えなければならない事があったからだ。『どうしたらこの部屋から出る事ができるのか』

いつまでもこの部屋にいるわけにはいかない。会社を無断欠勤することだけはどうしても避けなければならない。勝手に会社を休む人間には大事な仕事は任せられないし、そうなると出世の道も遠ざかる。俺は負け組サラリーマンにはなりたくないのだ！

会社に連絡だけでもしておきたかった俺は、そこでようやく鞆がないことに気づいた。鞆がな

いということは、携帯電話がないということだ。俺は部屋を見渡し、もう一度、鞆を探した。羊の後ろを見て、部屋を見て、もう一度羊の後ろを見た。しかし、鞆などどこにもなかった。

俺をこんな目に遭わせている人間は、俺が焦りながら鞆を探している様子を観察していて、楽しんでいるのだろうか。そう考えると、私は苛立った。苛立ちながらも、とにかく、出口を探した。私は約一時間程かけて、床や壁をくまなく探してみたが、どこにも出口は見当たらなかった。継ぎ目どころか、一つのヒビさえ見つける事ができなかった。

どのくらいの時間が経ったのだろうか。二時間か、三時間か。時計もない空間で徐々に俺の時間感覚が狂い始めていた。

俺は羊を観察する以外、やるべきことがなかった。何もない部屋で考える事といえば、次に羊が何をするか、という事ぐらいだった。右足をあげるのか、それとも鳴き声をあげるのか。下らなすぎて笑えてしまう行為ではあったが、それくらい考える事がなかったのである。もし羊がいなかったら、本格的に俺は何も考える事がなくなってしまう。俺にとって羊が娯楽だった。

時間が経つに連れて、次第に羊への関心は強くなっていき、俺は羊に触ろうと試みた。しかし、羊はある一定の距離まで近づくと、部屋の端から端へと逃げてしまうのだった。

だが、時間が経つにつれて羊の警戒心も薄れていき、俺が近づいても、逃げないようになっていた。それどころか、頭を撫でてやると嬉しそうに鳴き声をあげるようになった。

そして、同じ時間を過ごすに連れて、俺は羊の鳴き声の意味を理解できるようになっていった。嫌がっている鳴き声、喜んでいる鳴き声。ずっと聞いていると、だいたい理解できるのだ。

羊のほうも、俺の言っていることを理解できるらしく、来いと言ったら近づいてくるし、離れろと言えば一歩下がった。

コミュニケーションが取れるとなると、必然的に羊に愛着がわく。同じ境遇に立たされた者同士ということもあるだろう。俺は羊に名前を付けることにした。太郎、二郎、という単純な名前からスタートして、スティーブンなどと少しシャレた名前を考えた。

「よし、お前の名前は花子だ！」

そう言って、俺は羊の頭に手を乗せた。やはり、名前は単純で呼びやすいほうがいいだろう。そして何より愛嬌があったほうがいい。『花子』いい名前だ。これには羊も納得してくれるはずだ。そして、嬉しさのあまり、歓喜の鳴き声をあげるに違いない。そう思っていた私は次の瞬間、度肝を抜かれた。

「我が名はヨハネである」

花子が喋ったのである。いや、ヨハネと言うべきか。いや、そんなことはどうでもいい。

「羊が喋った……？」

「羊ではない。私は私だ。羊はただの媒介に過ぎない」

男の声が羊から聞こえてくる。

「媒介？ つまり羊を通して話しているということか？」

それはそうだろう。羊が人の言葉を話すわけがない。ならば、羊の毛の中にでもスピーカーが仕込まれていて、きっと無線マイクを使って俺に話しかけているのだ。

「貴様はどこにいるのだ！」

「どこにもいない。いや、どこにでもいるのだ」

「わけのわからないことを！」

「都合のいい解釈をしてくれたまえ。君にとって私は羊だと言う認識もあながち間違いではないし、君の脳の中にいる存在だという認識も間違いではない。」

「ふざけるのも大概にしないか」

意味のわからぬ事を言って俺を煙に巻こうとしているのだろう。ならば、決定的な証拠を突きつけてやるだけだ。俺は羊の毛の中を手で掻き分けて、スピーカーを探した。しかし、それらしきものは見つからない。羊の口を開けて、口腔内も調べたのだが、そんなものはなかった。

「いったい何をしているのかね？」

羊から聞こえていた声が、今度は耳元から聞こえてきた。いや、耳元というよりは直接脳に話しかけられたような感覚だった。

俺は言葉を失い、周囲を見渡した。いったい何が起こっているというのだ。

「お前はいったい誰だ？ 俺に何をした？」

「私はヨハネ。それ以上でもそれ以下でもないし、私は君に何もしていない」

「何もしていないというなら、なぜ私はこんな状況に置かれているというのだ！」

「なぜ、と問うても答えはない。君にとって過程は解釈に過ぎず、結果のみが真実であるからだ」

「何を偉そうに講釈して何様のつもりか！」

「それなら、一つ問う。君の質問を私が一つだけ答えるとしたら君は何を聞くかね？」

「それは俺が聞いたら、本当に答えてくれる、というなんでしょうな？」

「それはもちろん」

「ここから出るためにはどうしたらいいのか？」

俺は間髪入れずに聞いた。

「私はその質問を聞いたかったのだよ。それが君の本当に知りたいことであり、そして、私が伝えたいことである」

「前置きはいいいから、早く言ってくれないか？ 俺はどうしたらここを出る事ができるのだ！」

「目の前に羊がいるね？ 殺したまえ」

「殺す？ 羊を？」

唐突な言葉に頭が追いつかなかった。間を置いて、やがてその言葉の意味を理解する。

「首を絞めるなり、頭を殴打するなり、やり方は君が決めていい。じっくりいたぶって殺してもいいし、さくっと殺してもいい。それは君の自由だ」

「なぜそんなことをしなければならない？」

「羊を殺さなければ部屋を出られないというのだから、殺す理由は明確に与えられていると思うがね。部屋を出るため羊を殺す。理由は簡単ではないか」

「違う。そういう意味ではない。俺が知りたいのは、なぜ羊は殺されなければならないのか、ということなのだ。君が羊を殺したい理由はなんだ？」

「私はただ君に羊を殺させたいだけだ。意味など存在しないし、そもそも、君が意味を考える必要はない」

「いや、意味がないということはないはずだ。何の理由もなく、ただ単に羊を殺すことなどということは俺にはできない。例えば、殺した羊を食べるため、とか、羊が作物を荒らすから、とか、殺す理由があるはずだ」

「羊を殺す事に何の意味があるのか、と問うことは無意味だ。それに、ここでは私が絶対的なルールであるから、私は君に説明責任を負わない。真実の一つだ。羊を殺せば君は助かる。それだけだ」

「だから、なぜ俺が羊を殺さなければならないのか。無意味というのでは、話にならない。殺した後、羊はどうなる？ 君は羊が憎いのか？ それとも君はただ単に羊を殺すところを見たいだけなのか？ 猟奇的好奇心を満たしたいということなのか？」

「君はその答えを知る必要はないし、私が答える必要もない。元より、答えなどない。意味が欲しければ君が勝手に解釈したまえ。私は説明責任を負わない」

「君が俺に羊を殺させるのだから、説明しなくてもいいということはない！」

「困ったものだな……」男は少し間を空けて話し出した。「例えば、君の前に紙粘土があったとしよう。君は何気なく二つの紙粘土をくっつけた。それには何の意味もない。君はただそうしかっただけだ。しかし、紙粘土は考える。どうして我々はくっつけられたのか。そして、解釈する。きっと大きな粘土が欲しかったのだ、と」

「粘土が物を考えるわけがないだろう」

「まあ、最後まで聞きたまえ。合理的な理由があれば納得できて、安心するという心理は汲み取る。しかし、そこに明確な答えなど存在しない。あるのは紙粘土による解釈と、それによって得られた心の平穏だ。

君もまた然り、どうして羊を殺さなくてはならないのか、と考える。だが、明確な答えなどない。なぜなら、羊を殺す事に私はまったく論理性も必然性も持っていないし、それらは全てただの気まぐれで思いついたことだからだ。私はただ、なんとなく、君に羊を殺させたいだけなのだよ。

だから、羊を殺す理由が欲しいと言われても、ないのだ。どうしても理由が欲しいなら、自分で考えて勝手に解釈しろ、としか私は言えない。わかってくれたかな？」

「何が勝手に解釈しろだ。君の言っていることは要領を得ない。私は紙粘土などではないし、紙粘土をくっつける事と、羊を殺すことは違う。羊を殺すことはおもちゃで遊ぶ事とは違うのだ」

「君のものさしでは違うかもしれないが、私のものさしでは同じなのだ」

「それでは、俺は紙粘土と一緒にだと言うのか！」

「そうではないかね？ 事実、私の前で君は無力なのだ」

「馬鹿にしゃがって！」

何が紙粘土だ。何が無力だ！ しかし、悔しい事に奴の言うとおりに、今の俺は無力だ。自力でこの部屋から脱出することはできないし、部屋を出るためには奴の言葉に従うしかない。奴の言うとおりに、俺は紙粘土と同じなのか。

俺は八つ当たりに壁を叩いた。

いや、紙粘土は抵抗できないが、俺は奴に抵抗できる。俺は奴のおもちゃではないのだ！

「とにかく、羊を殺せば君はこの部屋を出られる。どうしても聞かれても理由などない。ただ単になっているということだ。君がここを出たいというのなら、何の疑問を持たず羊を殺したらいい。もちろん、殺さないという選択肢もあるが」

「もし、俺が羊を殺さなかったらどうなる？」

「どうもならない。羊を殺せば外に出られる。それが唯一のルールであり、全てだ」

「羊を殺さなければ、俺はここで餓死するというのか？」

「結果的にはそうなるだろう」

奴に指示されるがまま、言いなりになるというのは癪に障る。俺は奴のおもちゃではないのだ。しかし、従わなければ、外に出られないのは事実。それなら、羊を殺す他ないのかもしれない

。それに、外に出るなら、早ければ早いほうがいい。早く外に出れば、それだけ色々とフォローができる。無断欠勤の日が長くなれば長くなるほど、言い訳ができなくなる。時間感覚がないのでわからないのだが、もしかしたら、まだ遅刻程度で済むかもしれない。遅くなればなくほど、状況は悪化していくのだ。変に抵抗するより素直に従ったほうが、いいのかもしれない。

「本当に羊を殺したら、ここから出られるんだな？」

「もちろんだ」

俺は今一度、奴に確認をすると、花子に視線を向けた。花子は俺の視線に気づいたのか、遊んでくれ、と鳴き声をあげながら歩み寄ってきた。

目を閉じながら、花子の頭を撫でてやる。気持ちよさそうな鳴き声をあげる花子。俺は数分の間、花子と遊び、そして覚悟を決めた。

「花子、すまない！」

そして、俺は羊を、花子を殺したのだ！

さあ、目を開ければ、そこには日常が待っているはずだ。上司に電話をして、すぐに会社に向かわなくてはならない。それにしても、いったいどこで目が覚めるのだろう。記憶があるのは、駅のホームで電車を待っているところまでだ。ということは、駅のホームで目が覚めるのだろうか。とにかく、目を開けてみればわかるはずだ。俺はゆっくりと目を開けた。

眼前に広がるのは白い部屋。そして、目の前にはおっさんが椅子に座っていた！

「私は田中である」

堂々とした態度でおっさんが言った。

「はあ……」

俺は気の抜けた返事をした。いや、そうではない。

「俺はここから出られるはずだったのではないのか!？」

「君が罪のない子羊を殺した、との通報を受けてね。事実確認に来たのだ。君は本当にあの羊を殺したのかね？ 本当なら動物虐待の疑いで君を捕まえなければならない」

田中は真剣で、厳しい目つきをしていた。

「確かに俺は羊を殺した。だが、誤解のないように言っておくが、俺は羊を殺したくて殺したわけでは、決してない」

「殺したくて殺したわけではない、ということは『事故だった』ということかね？ 故意に殺したわけではない、と？」

「いや、事故ではない。故意に殺したのだが、殺したくて殺したわけではない。快楽や娯楽のために殺したわけではないということだ」

「故意に殺した、ということは、殺したくないが殺した、という事とは矛盾するね。 故意に殺した、ということは、殺したいから殺した、ということにはならないかね？」

「そうではない。私は脅されていたのだ。羊を殺さなければ、私が殺されていたのだ」

「なるほど。君は死にたくなかった。自分が生きるために羊を殺した。つまり、それは殺したいから殺した、と同義ではないかね？」

「違う。殺したいから殺したわけではない。死にたくはなかった。だから、殺したくはなかったが仕方なく殺したのだ！」

「要領を得ぬな。君は故意に羊を殺したのだろう。それなら、貴様は羊を殺そうと思ったはずだ。それはつまり、殺したいから殺した、ということと同義ではないか」

「殺したいとは思ってはいない！ 殺さなくてはいけない状況だったから仕方なく殺したのだ」

「殺したくなかったと口では言いつつも、その実、殺しているのだから始末が悪いな。殺したくなかったのなら、羊を殺さず自分が死ぬばよかったのだ。しかし、自分の命と羊の命を天秤にかけた。その結果、自分の命のほうが重かった。死にたくないから羊を殺した。なら、素直に羊を殺したかったと言えればいいであろうに。なぜ、君は私に嘘をつくのかね？」

「本当に羊は殺したくなかったのだ。だが、殺さずにはいられなかった。状況が私にそうさせたのだ！」

「それは、初めは殺したくないと思ったが、状況に追い詰められ、最終的には殺したいと思い、殺した。と言うことではないかね？」

「いや、最後まで殺したくないと思った。殺したくないと思ったが、殺してしまったのだ」

「殺してしまった……うむ。それは、やはり事故だったというのかね？」

「事故ではない。事故ではないのだが、故意といえるほどの積極性があったかということ、俺にはなかった！」

「なるほど。介護に疲れた子供が親を殺した。殺したくはなかったが、これ以上面倒を見る金も心の余裕もなかった。だから、親を殺した。と同じかね？」

「例えが気に食わないが、それに似ていると思う。まったく同じかといわれると自信がない」

「三人の人間が遭難をした。食べる物がなく、一人の人間を犠牲に、殺して食べる事にした。殺したくはなかったが、残り二人が生き残るために一人を殺した。これも今の君の状況に似てると思うが、どうかな？」

「似てると思う」

「うむ。この二つの例は、自分の命と他人の命を比べ、自分の命を優先し、他人の命を奪った。ということだね。過程はどうあれ、結果として殺したのだから、殺したくて殺した、ということになるではないか」

「あなたは1か0でしか考えられないのか！ 殺したくて殺した。殺したくないが殺した。その二つがあってもいいのではないか」

「二つに分けるのは構わない。だが、私はその二つは、その実、殺したくて殺した、と同義ではないか、と言っているのだ」

「同義ではない。殺したくはなかったが殺した。というのは、殺したくて殺したと同義ではない。同義なら二つの言葉を分ける必要もない。分けられる以上、二つに明確な違いはあるのだ」

「殺したくなかったのなら、殺さなければよかったのではないのか。殺してしまった以上、必然的に殺したかったということになる。殺したい理由が君の中に確実にあったはずなのだ。そして、最終的に殺したい理由のほうが勝った。だから、殺した。それは殺したくて殺した、と同義ではないかと言ってるのだ」

「私は殺したくなどなかった！」

「だが、君は誰かに操られていたわけでもなければ、洗脳されていたわけでもない。自ら殺す事を選んだ。そうではないかね？」

「違う。選ばされたのだ。殺したくはなかった。だが、選択肢は一つしかなかった」

「君が死ぬと言う選択肢もあったであろう。だが、君は殺した。殺したくて殺したのだ」

「違う！ 私は本当に殺したいなどとは思わなかった。殺したくなどなかったのだ！」

「だが、現に君は殺しているではないか」

「では、私はどうすればよかったのだ！」

「良かった、と言われても、私は良い、悪いの話をしているのではない。君がどうすべきだった

のか、という質問に対して私は答えを持ち合わせてはいない。私は絶対的な価値観を持ち合わせた神などではないからだ。今私が尋ねているのは、君は故意に羊を殺したのか、ということだ。つまり、殺したくて殺したのか、と」

「私は殺したくて殺したわけではないのだ。だが、死にたくはなかった。だから、殺そうと思った。それだけなのだ」

「殺そうと思った。それはつまり、殺したかったということなのではないのか」

「殺したかった、と表現すると私が自ら進んで、積極的に殺したのだと聞こえるではないか。そうではないのだ」

「そういう意図はない。積極的だろうが、消極的だろうが、喜んでいようが、悲しんでいようが、殺したいという言葉は殺したいという言葉以上の意味を持たぬ」

禅問答のようなやり取りの繰り返しに疲れ、俺はついに根負けした。

「あなたが定義する殺したいという言葉を使うのならば.....殺したかったと表現できるのかもしれない」

「では認めるのかね？ 君は羊を殺したくて殺したのだと」

「認めるも何も、そう言って欲しいのだろう！ 殺したくて殺した、と言って欲しいのだろう」

「言って欲しいなどとは思わん。私は起きた事を起きたまま、事実を事実のまま述べているだけだ。そして、君にも事実を事実のまま述べて欲しいのだ。改めて聞くがね、君は故意に羊を殺したのかね？」

「事故か、故意かと聞かれれば故意だろう」

その瞬間、俺の意識は再び闇の底へと落ちた。

*

目を開けると、白い部屋にいた。目の前にはおばさんが椅子に座っていた。

「私は小松です」

「またか！」

「話は聞かせていただきました。あなたは故意に羊を殺したそうですね？」

「またその話か。だから、故意に殺したとは言うが、実際のところ、俺は殺したくはなかったのだ」

「しかし、あなたは『事故か、故意かと聞かれれば故意だろう』と答えたそうですね」

「確かにそうは言ったが……」

「なるほど。それ以上言葉を飾る必要はありません。あなたは既に自分の行った行為を認めているのですから」

「確かに言ったが、それを言う前にもっと会話があったのだ！」

「いいえ。言ったと言うことは言ったということです。それに変わりはありません」

「それは誤解なのだ！」

私はうなだれた。もはや反論する気力も残されてはいなかった。誤解が誤解を生んでいく伝言ゲーム。その大きな流れを俺はもう自分の手で止めることができなくなっていたのだ。

*

「――と話は続いていきます」

俺は駅員を見る。机の向こうに対峙している駅員が腕を組みながら、熱心に俺の話聞いていた。

「なるほど。それで、今の話と、先ほど君がした行為は何か関係があるのかね？」

聞き手に徹していた駅員が口を開く。

「もちろんです。少し解説させてください。まず主人公とヨハネの関係です。いわば主人公と羊は白い紙に描いてある絵です。そして、その絵を描いているがヨハネです。ヨハネは自由に主人公を描く事ができます。ヨハネは恣意的に主人公の行動を決定できる存在なんです。上位存在とも呼びましようか。違う表現をするなら、神や宇宙法則と言ってもいいでしょう。

次にヨハネと私の関係です。このお話は私が作ったものですから、ヨハネにとって私は上位存在になります。もちろん、ヨハネだけではなく登場する人物全員にとって私は上位存在です。

私は登場人物を恣意的に動かす事ができるわけです。だから、なぜ羊を殺さなければならないのか、とか、主人公は羊を殺したくて殺したのか、などと物語の中の人が問うことに本質的には意味がありません。物語の中にいる人がそんなことを考えても答えはないんです。なぜなら、上位存在である私の都合で、恣意的に登場人物は動かされるわけですから。

これらを鑑みてこれからの話を聞いてください。主人公の上位存在がヨハネであり、ヨハネの上位存在が私であります。主人公はヨハネの思いつきで羊を殺すことになり、ヨハネは私の気まぐれで主人公に羊を殺させた。では、私の上位存在とは何か？それを問うことは無意味です。下位存在は上位存在を自らの力で認識することは不可能だからです。しかし、これだけは確実に言えます。上位存在が私にあのような行為をさせたのです」

駅員は頭を掻いた。そのしぐさは、私の言っている事がきちんと伝わっているのだろうかと心配にさせる。

「それで、つまり、君は……女性のお尻を触ったと認めるのかね？」

「確かに触りましたよ。しかし、私は痴漢行為をしたいわけではなかった。痴漢をしたくはなかったんですが、してしまったんです。もう一度、言いますよ。私はお尻を触りたくはなかったんです。でも、触ってしまった！」

「電車が揺れて、たまたま手が触れてしまった、ということですか？」

「違いますよ！ 私の話を聞いてましたか？ ああ、これ以上、なんと説明したらいいのか！」

駅員は少し考えている様子だった。私は静かに駅員の考えがまとまるのを待った。

「あなたは女性の尻を触りなくなかった。社会的制裁を恐れて、触りたくなかった。しかし一方で触りたい理由もあった。女性のお尻が魅力的だったため……その、性的欲求とでも言いましようか。触りたい理由と触りたくない理由があり、最終的には触りたい理由のほうが勝り、触った。触ってしまった。これをあなたは触りたくなかったが、触ってしまったと表現しているという事ですか？」

「大筋ではその通りです。ですが、肝心な要素が抜けています。あなたは性的欲求と仰いました。確かに私は性的欲求を持っていた。しかし、その性的欲求は上位存在によって強制的に持たされたものなのです。私自身は本当に触りたくなかったし、触りたいとも思わなかった。しかし、上位存在が私に触ることを強いたんです！ 私は触るしかなかった！」

「あなたは、神様に命令されたからやっただけで、自分に責任はない、という事を仰りたいんですか？」

「責任はあるでしょう。触ったことには変わりはないのですから。ですが、これはプライドの問題ですよ。私がいかに触りたくて触った、というような誤解をされては困るのです！」

「なるほど。お話をまとめましょう。あなたは故意に女性のお尻を触った。事故ではなく、故意に。そうですね？」

「触ったか、触っていないかで言えば、触りましたよ」

「故意に？」

「故意にです、はい。ですが、触りたくて触ったわけではないです！」

「はい、わかりました」

駅員は私の言葉を遮るように早口で言った。

「これ以上、私に色々言われても困りますので、そういう言い訳……いえ、詳しいお話は警察の方に仰ってください」

そう言って、駅員は他の駅員を呼び、警察を呼ぶように指示をした。私はがっくりうなだれる。ため息をついてから、天を仰ぎ、天井を見つめた。いや、天井ではない。天井越しに見えないものを見ようとした。白く光る蛍光灯の向こう、空を越えて、宇宙を破り、そこに存在する者を。

「ああ、全てはあなたの恣意のままに」